



万国外科学会 (ISS/SIC) 日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部
〒213-8507 神奈川県川崎市高津区溝口 3-8-3
帝京大学医学部附属 溝口病院外科
TEL：044-844-3333(内線3223) FAX：044-844-3222
発行者：山 川 達 郎
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部広報担当委
員・村田宣夫（埼玉医大総合医療センター外科）
E-mail：03nmura@saitama-med.ac.jp
印刷：株式会社 dig TEL:03-3551-3060
年 2 回発行1995年4月創刊

支部長挨拶

万国外科学会日本支部長を 拝命して

万国外科学会
日本支部長

山川 達郎

（帝京大学医学部教授）



第72回日本臨床外科学会会期中の1999年11月25日、ホテル ニューオータニで開催された第8回万国外科学会日本支部総会で、私は、比企能樹名誉教授の後任として、万国外科学会日本支部長を拝命いたしました。誠に私にとりましては光栄なことであり、またその重責に身の引き締まる思いがいたしているところでございます。

私は、日本医科大学名誉教授、故斉藤 溥名誉教授を会長として日本で開催された本学会Congress 1977で、発表の機会をえて参加し、先生に推薦していただき入会いたしました。以来、本会の重要性を認識し、本会のCongressにはできるだけ出席するように務めて参りました。それぞれの学会では楽しかった思い出がありますが、それにも増してその都度、強く感じたことは本会の伝統に培われた重みのある歴史でした。これからも本会を大切にしながら、本会ならびに日本支部会の発展に少しでも貢献できればと考えております。今後とも会員諸兄のご支援とご協力を切にお願い申し上げます。

さて、記念すべき2001年のCentennial Congressは当然のことながら本会の発祥の地である、Brussels/Europeでおこなわれますが、現在、その他のCongress開催地として決定しているのは、2003年のBangkok/Asia、2005年のDurban/South Africaです。2007年の開催地に関しては、前回のVienna CongressでAustralian Section、Canadian Section、Cubann SectionとUS Sectionが立候補して、投票によりAustralian Sectionが選ばれたのですが、最も会員数の多いUS Sectionが主催すべきであるという意見が上層部に多く、最終決定は次回のCongressに委ねられています。最終的には、US Sectionが選ばれることになるかと考えられています。

そうした場合、多分、2009年のCongress開催地としてAustralian Sectionが再度立候補してくる可能性があります。現在、日本支部の会員数はVienna Congress時、293名でUS Sectionに次ぐ会員数を誇っておりますし、また本会に対する貢献度も高く評価されています。また前回、日本で開催された1977年から23年が経過しておりますので、日本招致の理由は十分であると考えられます。2009年の日本開催に向けて、会員は一致団結して努力しようではありませんか。

今回の第100回日本外科学会総会に、北島政樹会長は万国外科学会のPresident, Professor Samuel A.Wells Jr. はじめPresident - elect, Sir Peter J. Morris, Secretary General, Professor Rudiger Siewert, ISSF-Secretary Treasurer, Professor Lloyd M. NyhusとAdministrative Director, Mr. Victor Bertschiをお招きになっておられます。私もこれを大変に貴重な機会としてとらえ、Site - Inspection Tourを企画しております。Mr.Victor Bertschiほか何人かの役員が参加して下さるものと期待しています。よい印象をもってお帰りいただきたいと思っています。

万国外科学会日本支部会は、先生方のご尽力で学会の中でも重要な地位を不動のものとしつつあることは事実ですが、本会の日本招致には会員数の更なる増加が求められます。将来が期待される若い先生方のご推薦を事務局までお願いいたします。

理事挨拶

万国外科学会 (ISS/SIC) 理事 に就任して

万国外科学会
理事

比企 能樹

（北里大学名誉教授）



昨年8月のウイーンにおける万国外科学会総会において役員の交代が行われ、Jozef Sandor (Hungary) とSir David Carter (Great Britain) の任期満了に伴い、新理事としてJorge Cervantes (Mexico) と私（日本）が選出され、承認を得たことをご報告致します。

ご承知の方が多いと思いますが、本学会の理事は日本からの代表という立場でなく、地域的に世界の5大陸を視野に入れて選出されます。この度の新理事が何故日本から選出されたかという点、これまで本学会のPast Presidentとして学会運営の中核に居られた出月康夫前会長の、長年にわたる本会へのご貢献の賜物であると確信します。そして日本からの理事として、このたび私が選出されたことは名誉なこととはいえ、大変な重責であることを痛感している次第です。

現在本学会がやらなければならない課題はじつに多岐にわたっています。先ず本学会は外科領域における世界最古の国際学会として、世界の外科学をリードしていくという任務があることは確かであります。理事会ではそのために、外科学の今後の発展と行くべき方向についてこれまでも実に熱心に討議されて参りました。

例えば、既に回を重ねてきましたPost graduate coursesの必要性も、議論を重ねた後に着実に実行に移されております。歴史と伝統に輝く本学会に若い外科医を登用することにより、彼等のフレッシュな発想をもとにして更に発展に導いていくことが可能と考えられました。

また世界の外科医が2年に一度、一堂に会して、同じテーブルの上で勉強しようという本学会の設立主旨に基く伝統のあり方ですが、外科学がますます専門細分化されていく今日、各分野が集って切磋琢磨し合う機会を提供する本学会の役割の重さを、一層強く感じる次第であります。そのためにも多くの学会を包括しながら、学会を運営していく必要があると考えます。

現在、本学会を再び日本に誘致することを真剣に考える時期に来ております。1977年京都において第27回万国外科学会が開かれて以来、既に23年を経過しました。昨年のウイーンでの総会では2007年の総会を誘致したいと表明する国々は実に多く11ヶ国が手を挙げました。—Adelaide (豪) Havana (キューバ) Nice (仏) Budapest (ハンガリー) Granada (スペイン) Seattle (米) Montreal (カナダ) Cairo (エジプト) Athena (ギリシャ) Rome (伊) Istanbul (トルコ) —

1999年3月、出月先生がご出席になったチューリッヒの理事会の国際委員会では、これを4ヶ国に絞りました。この経緯はISS/SIC Newsletter May 1999に詳細が記録されましたが、要約すれば『開催地を決定するに当たり考慮することは、世界の各地域を満遍なく回す様にすること。ここ数年の開催地は1997年の米大陸・メキシコ、1999年の欧州・ウイーン、2001年は100年記念大会のため再び学会生誕地の欧州・ベルギー、更に2003年はアジア・バンコク、そして2005年はアフリカ・ダーバンである。』

従って2007年は北米（SeattleかMontreal）、カリブ海沿岸、太平洋地域に絞って、昨年のウイーンでの総会における投票を参考にして、2年以内に決定する』というものであります。ウイーン総会のactive memberによる投票結果は『1位豪・阿德レード、2位キューバ・ハバナ以下僅差で続く』とのみ発表され、最終決定はこの3月に行われるベルギーでの理事会で決定されることになりました。

わが国としてはウイーン総会の際、早々と会場でパンフレット配布やポスター貼付をして2009年開催の用意有りの非公式な意志表示を行いました。今後日本誘致の可能性は一重に地域的な点、すなわち“2007年がどの地域で行われるか”に左右されます。

日本支部はこのたび、山川達郎代表および北島政樹事務局長と願ってもない強力な陣営を張りました。現在、何時日本に開催が決定されてもよいように準備を進めて頂いているようです。何卒、会員諸公も揮ってご意見をお寄せ頂き、ご支援を賜りたいとお願い申し上げます。

特別寄稿

万国外科学会と私

大阪市立大学 第一外科

佐竹 克介



万国外科学会とは私にとって非常に意味の深い学会で、また、その名前に深い思い出があります。それは私が1970年から1972年の2年間、出月本学会前会長のご紹介で米国PhiladelphiaのHahnemann医科大学外科教室に留学し、Professor John M. Howardのもとで臓器外科を勉強させて頂きました。2年間の勉強が終わり、帰国を前にしてHoward教授より帰国後の勉強などについていろいろとご意見をいただきました。そのときに国際的外科学会としては万国外科学会が一番重要で価値のある学会で、帰国後にも国際学会で発表するなら万国外科学会で発表し、会員になるようにと言われました。当時、本学会はOlympicと同様に4年に1回の開催で、本学会の正会員になるのは非常に難しいとされていました。事実、図書館で帰国後調べますと多くの日本の著名な教授が本学会で発表されていますが、本学会の正会員になるのは困難であることが推察されました。帰国後、国際外科学会、国際消化器外科学会、米国外科学会など種々の国際的な学会に参加し、発表などしてきましたが、なかなか本学会に発表し、正会員の申請するのに二の足を踏んでいました。

そのため、私が本学会に参加させていただいたのはLisbonの学会が最初で家内とヨーロッパの国際学会に参加するのも初めてでした。ふたりではりきって出かけたのは良いのですが、思わぬことが起こりました。学会に向かう途中の飛行機内で家内の写真を取りカメラを彼女に渡しておきましたが、Lisbonで飛行機を降り入国審査に行くときに彼女がカメラを持っていないことに気付き、「カメラは」と聞くと「飛行機に忘れた。」急いで飛行機に戻り、カメラはありませんでした。何か出鼻をくじかれたようで何か変なことが起こらなければと不安でした。しかし、それは杞憂で発表も無事すみ、私もポルトガルは3回目でしたので家内をいろいろ案内し、ファドを聞いたり、観光を楽しみ、帰りにはスペイン、アルハンブラ地方を旅行し、多いに学問と観光を楽しみ、少しは私の面目が保てたと思いますが、気のせいかも知れません。当時の写真の多くは一緒に参加した日裏先生夫妻の撮影のもので、私たちが撮影した写真は殆どありません。

不思議なもので本学会と私たち夫婦とカメラの紛失が続くようです。アカプルコの学会は家内が同行しませんでしたのでカメラ紛失事件はなく、多いに学会、観光を楽しめましたが、ウィーンの学会では家内も同行し、と同時にカメラ紛失事件が発生しました。学会前日の会場でのパーティで出月教授ご夫妻と記念撮影した写真では家内の右手にカメラがありました。帰るときにはそのカメラは消えてなくなっていました。何処で紛失したか不明です。また、カメラなしの旅行になりました。

学会の方では2つの発表、座長のため、途中1日旅行で抜けましたが、学会1日目より最終日まで参加させて頂きました。しかし、最終日になりますと参加者は少なくなり、少し寂しい気になりました。座長は学会2日目で膵臓切除のセッションでしたが、参加者も多く、熱心な議論が行われ非常に盛り上がり有意義でした。しかし、学会4日目の私のポスター発表では座長2人のうち1人は来ず、参加者は20人前後で、発表者で来ない人もあり、恐らく質問もなく簡単に発表が済み、ラッキーと思って発表したところ、会場から質問がありました。やはり熱心に勉強する人がいますので、発表者で来ない人は非常に失礼なことと思います。この様な事は国際学会でよく見られますが、特にある国のひとに多く、ある国際学会ではその国のひとの発表は制限するとの意見もでています。日本人にはこの様な無責任なひとはいないと思っていましたが、ロスアンゼルス国際消化器外科学会で私の座長の前のセッションで同じ大学からの2人の日本人発表者が時間が来ても現れず、同じ日本人だから、私に探してほしいと頼まれ探しましたがみつからず、非常に恥ずかしく、同時に、困惑しました。勿論、彼らは会場のホテ

ルに来ておりましたが、パーティ以外、学会に参加していません。このような事は少なくとも日本人ではほしくありません。その点、本学会に参加していた三重大大学第一外科の田岡先生以下若い先生方が学会に参加し、よく勉強していたのには感心しました。

本学会の良さは、学問だけでなく、学会主催のパーティ、観光の3つがあると思います。パーティではいろいろの国の先生方と知り合うことができ、また、古くから知り合いの先生方と旧知を暖める機会もあり、非常に楽しい時が過ごせます。写真はオーストリアナイトでJonathan E. Rhoads教授にお会いして記念撮影を取らせて頂いたものです。一緒に写っている土屋名誉教授、京都大学井上教授、私はこの著名な外科医をよく知っていますが、若い三重大大学の先生方は名前も知らないとのこと少し驚きました。1970年Rhoads教授はペンシルバニア大学の外科主任教授で全世界で著名な外科医で、当時、私も一度ペンシルバニア大学へ先生を訪問させていただきました。約2時間いろいろとこれからの外科医の在り方、日本の外科の進むべき道などをお話し頂きました。今回、お会いして非常に懐かしく、お元気でしたので驚きました。

観光ですが、会期中に京大の井上教授と私たち夫婦とザルツブルグへ一泊旅行に行きました。モーツアルトの生誕地、サウンドオブミュージックの家などを観光し、楽しみました（写真、井上教授と）。夕方になり夕食をどこかでするか、観光の本をみて3人で考えましたが良い考えが無く本の中にレストランとしてカジノSchloss Klessheimが紹介されていました。そこで食事をして運が良ければ、カジノで一儲けしようと3人は一致し出掛けました。車で出掛けましたが、約40分のドライブでカジノのあるお城に着きました。門から玄関までのドライブではまるで007の気分で帰りは金持ち、出来れば帰りの旅費ぐらいいは稼ぐつもりで浮き浮き気分が入場、レストランはこじんまりして美しく、料理、ワインは安くおいしく文句ありませんでした。アルコールも入っていることもあり、サーこれからとカジノに入ろうとしたところ、私だけが入場を拒否、理由はスニーカーを履いていたからです。貸しクツは無いかと聞いたところ「ネクタイはあるが、貸しクツはなし」。先程の元気はどこへやら、諦め、帰ろうと思いましたが、レストランに多くのウェ이터がいたので、ひょっとしたらクツを貸してくれるかと思い、レストランに帰り、そのうち一人がロッカーにおいてある汚いクツを持参し、これで良ければと貸してくれました。（チップのお陰）。けちのついたばかりは良くない私と井上教授はルーレットでかなり負けましたが、家内はすこし勝ちました。帰りは007の気分ではなく、負け犬の心境でホテルへ帰りました。しかし、本旅行は非常に楽しい思い出に残るものです。

本学会は世界から参加し、学問だけでなく、開催地の人々とふれあい、その地方を観光することにより、お互いの国を理解しあうことも重要なイベントだと思います。日本人の参加者も年々増加しており、2009年には日本（京都）も本学会の開催地として立候補し、誘致したく、出月教授（本学会前会長）、比企教授（本学会理事）、山川教授（本学会日本支部長）、北島教授（本学会日本支部Secretary）が努力しておられます。もし、日本に誘致出来たらそんな嬉しいことはありませんし、日本の良さを世界に知ってもらい学問を通じての世界の平和に貢献出来ればとおもいます。

次回のブリュッセルの学会には多くの若い外科医が日本から参加し、本学会の良さを身を持って体験していただければと思います。また、私も参加できればその時はカメラを失わないように身にくりつけて参加します。



フルツロン® 薬価基準収載
抗悪性腫瘍剤（トキシフルリジン製剤）
Furtulon® 5-DFUR
①④（要旨）フルツロン/カプセル100・カプセル200
※効能・効果、用法・用量、警告・使用上の注意等は、製品添付文書をご覧ください。
（資料請求先）
Roche 日本ロシュ株式会社
〒105 東京都港区芝2-6-1

多価・酵素阻害剤 指定医薬品、要指示医薬品②
ミラクリッド注射液
MIRACLID Inj. 25,000/50,000/100,000単位
一般名：ウリナスタチン 健保適用
※「効能・効果」「用法・用量」「使用上の注意」等については添付文書をご参照下さい。
＜資料請求先＞
持田製薬株式会社
東京都新宿区四谷1丁目7番地
電話（03）3358-7211（代）〒160-8515



特別寄稿

ビルロートの切除胃を訪ねて

東京都立墨東病院 副院長

北村 正次



第38回万国外科学会がウイーンで開催された。ウイーンには過去2回訪問しているが、いずれもビルロートの切除胃を見学に行っている。私の専門が消化器外科の中でも胃癌である関係上、少しでもビルロート先生の偉大な功績にあやかりたいという思いからである。

2年前の訪問の時には駒込病院の胃癌グループの荒井先生と岩崎先生とともにビルロート巡りを行った。ビルロートに関する資料は乏しいが、新潟大学の故・堺哲郎教授がライフワークとして記された「Theodor Billrothの生涯」および東京歯科大学の吉野教授から頂いた資料を手には切除胃があるというウイーン大学の医学博物館（INSTITUT FÜR GESCHICHTE DER MEDIZIN）へ向かった。若作りの受付嬢に入場料を払い、目的の胃切除の標本と剖検標本のある陳列室へ行った。ほぼ中央に置かれた陳列台にビルロートの手術風景の写真がまづ目に飛び込んできた。その上段にホルマリン漬けになった切除胃と剖検胃がうやうやしく置かれていた（写真1）。

この患者は43歳の幽門狭窄を呈した女性で、ビルロート門下の三羽がらすの一人であるWölflerがビルロートのもとにつれていき手術が行われることになった。1881年1月29日、ビルロート51歳の時である。ビルロートはWölflerとMikuliczを助手にクロロフォルム麻酔下で1時間半で手術を終了した。もちろんリンパ節郭清は行われていない。この患者は4ヶ月後に再発死亡し、剖検が行われた。

剖検された胃は奇妙な形をしており、内腔を観察するために残胃前壁に切開縫合した痕が見られる。この残胃の形は理由は分からないが、残胃小弯側と十二指腸が吻合されたために出来たものである。後にビルロートはこの吻合では残胃の拡張と排出が悪いとの理由で、現在行われている残胃の大弯側と十二指腸の吻合を行っている。じっと切除胃と剖検胃を眺めていると、この両者を合体させた胃は元の原型に戻りうるのか、ちょっと奇妙な気がした。この二つの胃は同一人物のものであろうか。こんな疑問を持ったのは私一人であろうか？

ちなみに、史上初の胃癌切除を行ったのは止血鉗子でその名を残すPéanで1879年4月9日に行っているが第5病日に死亡、第2例目はRydygierが1880年11月16日に行っているが約12時間後に死亡している。従ってビルロートの手術が初めての成功例である。

私はこのホルマリンに漬けられた胃の写真を撮りたくて、カメラを構えたが、すかさず受付嬢がマイクで「ノー」と大きな声で叫んだため怯んでしまった。そこで荒井、岩崎両先生が本を買っている隙にパチリと撮ったのがこの写真である。残念ながらハレーションを起こし胃ははっきりしないが、その下にあるビルロートの手術風景のほうはよくとれていた（写真1）。

ビルロートの切除胃を見学した後、お墓参りに行くことにした。ウイーン中央墓地は広大な敷地の中にあり、門をくぐると広い並木道が続き、第14区画を少しはいた角地に黄色と紫のバンジーに囲まれたビルロートのお墓があった。それにはビルロートの横顔のレリーフとTHEODOR BILLROTH 1829-1894の文字が刻み込まれていた。手入れのよく行き届いた落ち着いたお墓であった。三人並んで「手術がうまくなるように」と合掌し、お互いに記念撮影をした。（写真2）。

並木道を挟んで反対側に大音楽家たちの墓があった。その一角にブラームスのお墓を見つけた。ビルロートとブラームスはZurich時代に非常に親密な関係を築いている。もともと、ビルロートは音楽の天才的な素質を持っており、ピアノを得意としていた。が、母の遺志で医学者になった。後に、ブラームスは彼の友情に対して作品51と弦楽四重奏曲2曲を献呈したというエピソードがある。一度聞いてみたいと思っている。



(写真2)

特別寄稿

国際学会の勧め

東京大学医学部附属病院胃・食道外科 講師

真船 健一



私はISS/SICに入会して、10年も経っていない新参者ですし、本来このような場に寄稿させていただく立場ではございません。しかし、折角の御厚意ですし、大変光栄なことでですので、ISS/SICをはじめとする国際学会の思い出とともに、21世紀の外科学を担う若い外科医（私自身もまだ若いと思っているのですが）に対する国際学会の勧めを、綴らせていただくことにいたします。

私が初めてISS/SICに参加したのは、1993年香港でした。3年ほど過ごした米国から帰国し、埼玉県立がんセンターで食道癌の手術に追われていた時期で、まだ留学ボケも抜けきらず、国際学会に飛びついた感もありました。もちろん、教室の出月康夫教授のお勧めが一番のきっかけでしたが。格安チケットで、夫婦共々、香港に出かけました。（米国での学会は、常に家族連れの旅行になっていたため、妻は当然のごとく自分も一緒に参加するつもりになっておりました。）米国では、当初貧乏生活をしておりまして、旅行といえばモテルばかり、それが今度は高級（？）ホテルに泊まり、学会同伴者のためのツアーに参加し、学会主催のdinnerなど、華やかで楽しい部分を味わってしまったのが、いけなかったのかもしれませんが。これ以降、妻は海外での学会には必ずついて行きたいと言うようになりました。肝心の学会の方は、外科のあらゆる分野にまたがっており、大変規模が大きいことが印象的でした。また米国の国内学会と異なり、英語が母国語でない人が多いので、容赦ない質問や討論をふっかけられることも少なく、比較的和気藹々とした雰囲気がしました。（少々もの足りなくも感じましたが?）

思い起こしますと、私がそれまで国際学会と思っていた学会はあくまで米国の国内学会でした。外科の学会では、Society of Surgical Oncology (SSO), Society of Academic Surgery (SAS), American College of Surgeons (ACS)などで、いずれも大会場での発表でした。初めての発表は1989年のSSOで、採択演題数（口演）はわずか52のみ。発表を終えた後、会場中央のマイクに質問者がずらりと並ぶのを見て、ぞっとしたものでした。余談ついですが、壇上から降りてくると、会長であったBlake Cadyが立ち上がって、握手を求めてきたことに、大変感激いたしました。リスボンのISS/SICでも、私が胃リンパ腫の発表を終えると、座長のEncke（ドイツ）と最前列にいたJ.-P. Kim（韓国）がVery good presentation! と言って、握手をしてきたのは強く記憶に残っています。（これは日本の学会でもやると良いと思うのですが…）

1995年には、既に医局を退局し、埼玉県立がんセンターで食道にとどまらず、消化器癌全体を担当して、ますます忙しさに追われる毎日でした。しかし、それでもミラノのISDEに続いてリスボンのISS/SICに参加いたしました。その後、1996年に大学に戻り、幕内雅敏教授のもと、現在にいたるまで胃・食道を中心に消化管疾患を担当しておりますが、アカプルコには残念ながら行けませんでした。（教授の肝臓手術が多すぎて、教授の留守中にできるだけ胃・食道の手術をしておかないといけないのです。）1999年ウイーンでのISS/SICには、「シンポジウムならまだしも、ポスターじゃな」と教授に言われながらも、頑張っ出てかけました。今度のブリュッセルは、みんなでどんな演題を準備しようか、費用はどう工面しようか、教授の許可がうまくもらえるか、それまで首がつながっているか、中間管理職の悩みはつきませんが、それにもましてISS/SICの魅力はつきません。

現在、日本の外科医たちは以前よりずっと国際的になり、発表される英文論文の数をみても、欧米でも日本の外科を無視できないようになりました。しかし、学会では、英文を流暢に読み上げても、討論で質問の意味がわからず、きょとんとすることがよく見受けられます（ひとのことは言える立場ではないのですが）。英語の聞き取りが悪いこともあるのですが、緊張し過ぎているのかもしれませんが。日本の学会でも、質問は聞こえていても、質問の意図が理解できなかったり、最初の質問だけ答えて後は忘れてしまったり、まったく関係ないことを答えたりといったことはよくあります（それが学会技術であることもありますが）。実際、2度目のSSO発表の際に、質疑応答で私を手助けすると言った米国人fellowは、壇上で緊張のあまり質問が聞き取れず、結局何の助けにもなりません。もちろん日本人にとって英語の壁が厚いのは確かです。しかし、発音や文法などはあまり気にせず、自分の言いたいことをとにかく伝えることが重要です。（旅の恥はかき捨て、偉い先生たちが四苦八苦しているのですから、心配ありません。そんな偉い先生方とお近づきになる機会でもあります。）おおいに国際学会に出て行きましょう。そして家庭サービスもその際しておきましょう。ISS/SICはその点では申し分ない学会だと思います（2年に一度で良いのですから）。そういう中からACSのSurgical Forumなどに発表する若手が出てくることと思います。そして、米国の国内学会でも、米国人とやりあえるような本当の意味での国際的な外科医が一人でも多く出てくることを期待いたします。

万国外科学会 第8回日本支部会 総会議事録

開催日時：平成11年11月25日 午前7時
場所：ホテルニューオータニ（東京）

- 1 理事会（ウィーン）報告
- （1）石川浩一先生が万国外科学会の名誉会員に推戴された。同時にHeidelbergのTroede先生もなった。
- （2）比企能樹先生が万国外科学会のcouncilor（理事）に推戴された。
- （3）機関誌であるWorld Journal of SurgeryのImpact factorが上昇した。Editorの阿部令彦先生、高木弘先生が任期満了で退任された。
- （4）World congressは次回ブリュッセル、その次がバンコック、その次がダーバンでその後がAustraliaのアデレードになっていたが、自主的に降りたとのことである。アメリカに変わる可能性がある。2009年に日本が京都で立候補することを考えている。
- 2 庶務報告
- 会員数 293名（正会員 281名、特別会員 11名、名誉会員 1名）
- 新入会員 16名（平成11年1月から11月17日まで）
- 退 会 1名（平成11年6月から11月17日まで）
- 平成11年会費納入者 188名（納入率 67％）
- 3 石川浩一先生から名誉会員に推戴に関してのご挨拶があった。
- 4 日本支部役員の交代
- 比企能樹先生が理事になられたので日本支部長・日本代表には山川達郎先生になって頂くことになった。
- 山川達郎先生よりご挨拶があった。
- 5 出月康夫先生を名誉会員に推薦することとなった。
- 6 国際学会について
- 2000年11月のアメリカ臓臓病学会の案内があった。
- IAESが2003年に野口志郎先生がPresidentとして開催される。
- CICD（ISDS）において2000年のCongressのVice Presidentの一人に青木照明先生が選ばれた。

左は、第8回日本支部
会総会出席者です。
順不同で敬称は略させて
いただきました。

出野比石北馬小斎土松大山佐平田磨
月口企川島場寺藤屋本谷川竹山
康志能浩政正泰和涼純吉達克廉正
夫郎樹一樹三弘好一夫秀郎介三孝義

宮幕高白丸佐中川小砂北井廣前桜曾村
島内見日野藤原西川野上瀬田耕井和田
伸博高儀敏正正一太郎洋融宣
宜康博歩要紀三郎勝剛知仁郎一生天

万国外科学会（ISS）入会のご案内

現在万国外科学会（ISS）では新規入会会員を広く募集しております。先生方のお近くに万国外科学会にまだ入会されていない先生がいらっしゃれば是非入会をお勧め下さい。従来と異なり、外科医としての経験が比較的浅くても入会が認められるようになりましたので国際学会に興味のある若い先生方をお誘い下さい。入会申込用紙は事務局までご請求下さい。

事務局：帝京大学医学部附属溝口病院外科 担当 宮島伸宜
〒213-8507 神奈川県川崎市高津区溝口3-8-3
電 話：044-844-3333（内線3223） FAX:044-844-3222
年会費：120ドル（他に日本支部年会費5000円）

会員の特典

1 World Journal of Surgeryが毎号配布されます。

2 2年に1回の学術会議（次回はベルギー）の参加費が割り引かれます。

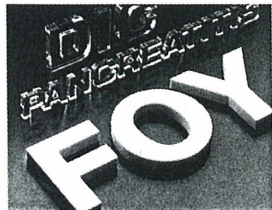
3 本部と日本支部からニュースが送られます。

編集後記
◆このニュースの編集を発行当初から担当しているが、果たして会員の先生方にどの程度読まれているのかと最近ふと思った。編集者の一人として全ての記事に目を通しており、特にご投稿いただいた先生方のエッセイはいつも何回か読む。それらは各先生方の貴重な体験が語られ、示唆に富み、同時に先生方の人柄が出ているようで実に面白いものばかりだといつも感じている。国際学会に出席する若い外科医が読んで決して損のない話ばかりである。おそらく多くの方々が読んでくださっているであろうと考えた。
◆ではこのニュースは廃棄・保存のどちらに入るのだろうか、と少々突っ込んで考えてみる。宅配される日刊新聞の運命を考えるとこのニュースもおそらく保存されてはいないであろう。しかし、もしどなたかに気に入っていただき、一部保存してあったり、切り抜いてスクラップブックに貼ったりファイルに入れてくだされば有り難いことである。もしバックナンバーをご希望の場合は当方へご連絡ください。（村田宣夫）

万国外科学会 日本支部役員名簿

医師名	病医院名	役職
山川 達郎	帝京大学医学部附属溝口病院	日本代表
比企 能樹	北里大学東病院	万国外科学会理事
北島 政樹	慶應義塾大学医学部	事務局長
出月 康夫	埼玉医科大学総合医療センター	前会長
馬場 正三	浜松医科大学	監事
田中 雅夫	九州大学医学部	監事
青木 照明	東京慈恵会医科大学	幹事
石田 清	埼玉医科大学	幹事
今村 正之	京都大学医学部	常任幹事
沖永 功太	帝京大学医学部	幹事
小原 孝男	東京女子医科大学	幹事
恩田 昌彦	日本医科大学	幹事
川原田嘉文	三重大学医学部	幹事
北野 正剛	大分医科大学	幹事
小林 国男	帝京大学医学部	常任幹事
斎藤 和好	岩手医科大学	幹事
佐竹 克介	大阪市立大学医学部	常任幹事
佐藤 紀	埼玉医科大学総合医療センター	幹事
嶋尾 仁	北里大学東病院	常任幹事
白日 高歩	福岡大学医学部	常任幹事
曾我 淳	新潟大学医療技術短期大学部	幹事
高木 弘	名古屋大学医学部	幹事
高橋 俊雄	京都府立医科大学	幹事
高見 博	帝京大学医学部	常任幹事
田尻 孝	日本医科大学	幹事
中尾 昭公	名古屋大学医学部	幹事
中川原儀三	市立敦賀病院	幹事
平山 廉三	埼玉医科大学	幹事
磨伊 正義	金沢大学がん研究所	幹事
松野 正紀	東北大学医学部	幹事
松本 由朗	山梨医科大学	幹事
村田 宣夫	埼玉医科大学総合医療センター	常任幹事
門田 守人	大阪大学医学部	幹事
山岡 義生	京都大学医学部	幹事
酒井 滋	帝京大学医学部附属溝口病院	幹事

（所属を変更された先生は日本支部事務局までご連絡ください）



劇 薬
指定医薬品

蛋白分解酵素阻害剤

●急性肺炎

●慢性再発性肺炎の急性増悪期

●術後の急性肺炎

●汎発性血管内血液凝固症(DIC)

注射用 **エフオーワイ**®

注射用メシル酸ガベキサート

●効能・効果 ①蛋白分解酵素(トリプシン、カリクレイン、プラスミン等)遊脱を伴う下記諸疾患
急性肺炎、慢性再発性肺炎の急性増悪期、術後の急性肺炎
②汎発性血管内血液凝固症 薬価基準収載

DICに

劇 薬
指定医薬品

蛋白分解酵素阻害剤

注射用 **エフオーワイ500**

注射用メシル酸ガベキサート

●効能・効果 汎発性血管内血液凝固症 薬価基準収載

禁忌（次の患者には投与しないこと）
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

■用法・用量
1.肺炎には通常1回1バイアル（メシル酸ガベキサートとして100mg）を5%ブドウ糖注射液又はリンゲル液を用いて溶かし、全量500mLとするか、もしくはあらかじめ注射液用5mLを用いて溶かし、この溶液を5%ブドウ糖注射液又はリンゲル液500mLに混和して、8mL/分以下で点滴静注する。
(1)原則として、初期投与量は1日量1～3バイアル（溶解液500～1,500mL）とし、以後は症状の消退に応じ減量するが、症状によっては同日中にさらに1～3バイアル（溶解液500～1,500mL）を追加して、点滴静注することができる。
(2)症状に応じ適宜増減。（①は総用量オーバーのもの）
2.汎発性血管内血液凝固症には通常成人1日量メシル酸ガベキサートとして20～39mg/kgの範囲内で24時間かけて静脈内に持続投与する。
(注射用エフオーワイ、注射用エフオーワイ500共通)

〔用法・用量に関連する使用上の注意〕
汎発性血管内血液凝固症には本剤は高濃度で血管内壁を障害し、注射部位及び刺入した血管に沿って静脈炎や潰瘍・壊死を起こすことがあるので、末梢血管から投与する場合、本剤100mgあたり50mL以上の輸液（0.2%以下）で点滴静注することが望ましい。

■使用上の注意
1.重要な基本的注意 まれにショックがあらわれることがあるので、十分な問診と救急処置のとれる準備を行い、投与にあたっては観察を十分に行い、血圧低下、発赤、痒疹、不快感、嘔気等の症状があらわれた場合は直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。2.副作用（肺炎）副作用集計の対象となった3,893例中85例（2.18%）に副作用が認められた。主なものは血管痛・静脈炎・発赤等投与部位に関するもの59例（1.52%）、発疹・痒疹等過敏症に関するもの25例（0.64%）、血圧低下5例（0.13%）、悪心・嘔吐等消化器に関するもの12例（0.31%）などである。（末梢静注の調査及び1981年3月迄の副作用頻度報告結果）（汎発性血管内血液凝固症）副作用集計の対象となった1,952例中56例（2.87%）に副作用が認められた。主なものは血管痛・静脈炎・発赤等投与部位に

関するもの37例（1.90%）、発疹・痒疹等過敏症に関するもの5例（0.26%）、GOT・GPTの上昇等の肝機能異常5例（0.26%）などである。（再審査終了時）(1)重大な副作用(1)ショックまれにショックがあらわれることがあるので、症状があらわれた場合には直ちに投与を中止すること。(2)血管 本剤の濃度、投与速度が増加すると、血管内壁を障害し、注射部位及び刺入した血管に沿って静脈炎や潰瘍・壊死を起こすことがあるので観察を十分に行い、注射部位の血管痛、発赤、炎症等があらわれた場合には減量又は投与を中止すること。(3)白血球減少 白血球減少（0.03%）があらわれることがあるので、異常が認められた場合には投与を中止すること。

②その他の副作用

過敏症	0.1～1%未満	0.1%未満	頻度不明
過敏症	発熱、痒疹等		
出血傾向増加		出血傾向亢進	
血液凝固		顆粒球減少	好酸球増多
肝 臓	血圧低下		
腎 臓	GOT・GPTの上昇等		
その他	悪心	顔面潮紅、発熱、高カリウム血症	

頻度不明は自覚症状による (注1)：発現した場合には投与を中止すること。
(注2)：発現した場合に投与を中止すること。

3.高齢者への投与 一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。4.妊婦、産婦、授乳婦等への投与 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には大量投与を避けること。〔大量（100mg/kg/11）投与でマウスに胎児体重の増加の抑制が認められている。〕5.適用上の注意 (1)投与速度：点滴静注する場合、投与速度が増加すると血圧が低下することがあるので、メシル酸ガベキサートとして体重1kg当たり毎時2.5mg以下とすることが望ましい。(2)投与時：薬液が血管外へ漏れると、注射部位に硬結、壊死を起こすことがあるので、薬液が血管外へ漏出しやすいよう注意すること。また、血液うっ滞が起こらないようできるだけ太い血管より投与すること。(3)調製時：1)溶解後はなるべく速やかに使用すること。2)他の注射剤（抗生物質製剤等）と配合した場合、混濁等の配合変化を起こすことがあるので注意すること。

●詳細は注射用エフオーワイ、注射用エフオーワイ500各々の添付文書をご覧ください。

製薬元 小野薬品工業株式会社
資料請求先 1541-5525 大阪府中央区道徳町2丁目15番5号 89906